ISSN 0917−4729

花嫁用刺繍付衣服（ナーナイ）
ユリア・ディミトルヴナ・サマール作
丈 115.3㎝

北方民族博物館だより
−42号−

大林太良初代館長追悼　大林先生の思い出　2
講習会　アイヌの楽器・トンコリ講習会　4
事業報告・今月の表紙・お知らせ　5
ニュース　6

大林先生の思い出

佐々木　史郎（国立民族学博物館）

当館々長室で

大林先生との初めての出会いは今から23年前1978年の秋のことです。私は当時東京大学の2年生でして、駒場の教養学部教養学科に設置されていた文化人類学専攻への進学が決まったときでした。東大は入学時に学部、学科、専攻などを決めず全員が教養学部に入学して教養課程を1年半かけて習得し、2年生の後期から専門課程の授業を受けることになっていました。その年の後期には大林先生の「民族誌」という授業がありまして、その学期は偶然だったのでしょうが、シベリアのシャマニズムに関する授業でした。学期の前半は先生の講義が続きましたが、後半は先生が用意された論文を学生が読んで報告することになり、私はソ連の民族学者でエヴェンキの専門家だったガリーナ・ヴァシレーヴィチの論文を担当しました。エヴェンキのシャマンがいかにしてシャマンとなるかということがテーマの英語の論文でして、非常に興味深く読んだのですが、先生にコメントするようにいわれて、読むのが精一杯だった私はしどろもどろになってしまったのを今でもよく覚えています。

翌年の春、先生は文化人類学専攻の学生には必修の「文化人類学演習」という授業を担当されました。4月の最初の授業の時、他専攻の学生も合わせて十数人の学生が教室に集まっていたでしょうか。先生は現れるなりいきなり今年はこの本を読みますとおっしゃって、1冊の分厚い本を机の上に置かれました。見るとドイツ語で書かれた東南アジアの少数民族に関する歴史民族学の本です。実はその時集まってきていた学生の中にはドイツ語をまともに読める学生はいませんでした。私も第2外国語にロシア語を履修していてドイツ語は第3外国語として少々かじった程度。大体教養課程で2年間習った程度で専門書が読めるわけはないのです。学生たちからどっとため息がもれました。

しかし先生は学生たちの反応を全く意に介さずに、本格的な授業は連休明けから開始するから、早急にコピーを作って十分予習しておくようにと命じられました。さらにひとこと次のようにも付け加えられました。「アノー、君たち。語学などというものは1日に100ページのペースで読んでいれば文法なぞ知らなくても読めるようになるんだよ。僕も、アノー、オランダ語を始めたときは文法を知らなかったけど読んでいるうちに読めるようになった。アノー、まだ1ヶ月以上あるから、心配なら文法書を見ながらでもいいから、読んでおきなさい。」

学生たちからさらに絶望的なため息が漏れたことはいうまでもありません。しかし、文化人類学専攻の学生にとっては何しろ必修の科目でしたので、単位を取らないわけにはいきません。私たちは先生から本をお借りして、そのマスターコピーを作り、そこからさらに人数分のコピーを作りました。当時は今のように安くコピーできる時代ではありません。学生たちに許されたのはいわゆる「青焼き」という住宅の設計図面によく使われるような淡い青色のコピーでした。そしてそれから連休明けまでの1ヶ月、ドイツ語の辞書を片手にその読みにくいコピーと格闘しました。でも結局間に合いませんでした。1ヶ月の予習では100ページはおろか、せいぜい10ページがやっとでした。何しろすべての単語を辞書で調べなくてはならず、1ページ読むのに2時間かかることも珍しくなかったからです。しかし、それでも先生はそのような学生たちを相手に東南アジア少数民族の文化史研究の方法論を懇切丁寧に教えて下さいました。

先生の専門がどちらかというと日本の南に広がる世界の方にあったことは事実です。先生の究極の目標は日本文化の形成過程を文化史的に復元していくことだったのですが、古文献にせよ民俗資料にせよ、日本文化を構成する様々な要素は、稲作文化に代表されるように、南の世界とのつながりを示すものが多かったからです。しかし、先生は日本の民族学や文化人類学

が北方に対する関心を失っていた時代でも、北方世界の研究の重要性を常に強調しておられました。おそらく、東南アジア、オセアニア、中国、韓国など日本文化研究では常に比較対象とされてきた地域の文化を知り尽くしたからこそ、北方世界の重要性を痛感されていたのではないかとも思われます。先生にとって北方世界は日本文化を文化史的に理解する上での最後の鍵だったのではないでしょうか。

私は大学院の修士課程に進学して先生に指導教官をお願いしました。ロシア語を活かして北方世界、とくにシベリアの少数民族のことを研究したいという希望をいいますと、先生は大層喜ばれて、大いに励ましていただきました。ただし、ドイツ語をしっかり勉強しておくようにと釘を差すことも忘れてはいらっしゃいませんでした。演習の時のこともさることながら、シベリア研究はロシア、ソ連だけではなく、ドイツ、北欧などでも盛んで、1960年代まではドイツ語で書かれた論文や著書が結構多かったのです。大林先生がシベリアに関して詳しかったのも、パウルソン、パブロート、フィンダイセン、フルトクランツなどドイツや北欧の研究者が書いたドイツ語の論文や著作を多数読んでおられたからなのです。ただし、先生のこの忠告を私はいまだに活かしてはいません。

私が大学院で勉強していた1980年代前半は、すでにアメリカではポストモダニズムやオリエンタリズムなど、民族学者や人類学者が描いてきた異文化像を批判する動きが始まろうとしていました。しかし、日本ではそのような潮流はまだ弱く、レヴィ＝ストロースが提唱した構造主義の流行がようやく下火になってきたところでした。同時に、改革開放路線が軌道に乗ってきて外国人に門戸を開き始めた中国での調査の期待が膨らんでいて、東大の文化人類学研究室でも中国研究熱が高まっていました。

文化人類学（大林先生は「民族学」という名称を好まれましたが）は研究対象とする人々の間で生活しながら調査する「フィールドワーク」という作業を前提とした学問です。ですから大学院の文化人類学専攻に進学してくる学生にとっては自分の関心とともに、調査ができるかどうかということも研究対象を選ぶ上で大事なポイントでした。しかし、私の場合シベリアの少数民族を研究対象としたくても、フィールドワークは夢のまた夢でした。

1980年代前半はまだ旧態依然としたソ連が健在でした。ブレジネフ書記長は1982年に死去したとはいえ、そのあとを継いだアンドロポフもチェルネンコも基本的にはブレジネフ路線を引き継いでいました。アメリカ大統領にもレーガンが登場し、冷戦は緊張を増すばかりでした。ソ連国内を旅行すること自体が難しかったのですから、西側諸国出身の外国人が秘密の多いシベリアで民族調査を行うなどとんでもない話だったのです。例外がなかったわけではありませんが、非常に厳しい監視下におかれてなかなか十分な調査などはできませんでした。

そのような時代にシベリア研究を志していた私は研究室ではやはり変人扱いされました。しかし、院生や助手など若手の研究者が醸し出す研究室の雰囲気に超然とされ、骨太の研究を続けられていた大林先生は、そのようなことをほとんど意に介さず、まずは文献を主体にしてシベリアの諸民族の文化をすべて頭に入れ、どの民族のどの文化について聞かれても答えられるように勉強しなさいと、研究の指針を示され、励まし続けられたのです。私がシベリア研究を続けられたのも、当時の先生のご指導と激励によるところが大きかったのです。

大林先生が民族学の巨人である所以は、その読書量と知識の豊富さだけでなく、各知識が有機的に連関しあって体系をなしていた点です。ただ、知識の量も半端なものではありませんでした。とにかく、本当の専門ではなかったシベリアについても、ロシア語の文献はお読みにならなかったにもかかわらず（先生はロシア、東欧系の言語だけは苦手にされていました）、私の数倍もの知識をお持ちで、しかもそれぞれ断片的ではなく、いずれも先生が解明されたい問題を解決するための鍵になっていました。こちらの質問に対して期待する数倍の量のお答えが返ってくる、あるいは参考にすべき論文名が次々と出てくるというのはその知識が単なる知識ではなく、常にご自分の問題意識と連関しあっていたからでしょう。

大林先生が道立北方民族博物館の館長に就任されたとき、私はある種の勝利感すら感じました。日本の民族学や人類学において北方研究は決して無視されてはいけない分野なのだということを先生が身をもって示されたように思いました。先生は多数の著書、論文、エッセイを書かれましたが、先生の民族学は文字に書かれたものだけではなく、その体全体から発散されていたのです。

おいしいものと本が大好きで、日本各地、世界各地どこへ旅行されても必ずその土地で発行された書籍とともに、そこの珍味や美味を探し求めては食されていました。東京や大阪だけでなく、網走でもちゃんと古本屋とおいしい店を探し出されていて、網走に出張されるときには楽しみにされていました。時に見せる先生の子供のような純真な笑顔は、学問だけでなくあらゆることに純粋な心で向き合っていた先生の人柄がにじみ出ていたのではないかと思います。

先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

アイヌの楽器・トンコリ講習会

講師　秋辺　得平 氏（北海道ウタリ協会理事）

平成13年6月2日（土） 13:45〜15:30

北方民族博物館では、教育普及活動などで利用するため、来館者が手に取って使用することができるような資料についても整備していくことにしています。こうした体験用の資料として、昨年度はアイヌの弦楽器・トンコリ（五弦琴）の製作を依頼し、20台を導入しました。このたびこれらのトンコリを利用し、製作者の秋辺得平氏を講師に迎えてトンコリの演奏方法を学ぶ講習会を開催しました。次にその概要を紹介します。

＊　＊　＊

まず講師によって、「トンコリ」という楽器の材質や構造についての説明がおこなわれた。アイヌ語で「トンコリ」と呼ばれる弦楽器は、サハリンや北海道の宗谷地方のアイヌが使用してきたもので、弦が５本のものがもっとも一般的であることから「五弦琴」とも呼ばれる。楽器の本体は木製で、エゾマツやトドマツ、イチイなどの木を刳（く）りぬき、板を張って製作する。弦の材料として、本来はクジラ、シカの腱（けん）やイラクサの繊維などがもちいられていたが、江戸時代以降は木綿製の三味線用弦が使用されるようになった。今回の講習会で使用するトンコリも、本体がエゾマツ製で三味線用の弦を利用したものである。トンコリは全体が人間の形をしており、各部分に人間の身体各部に対応する名称がつけられている。例えば、端の丸型の部分が「頭」、弦を締める糸巻きが「耳」、糸巻きが差し込まれている調弦部分が「首」、その下の左右に張り出した部分は「肩」、木をくりぬいた部分は「胴」、胴部のふたに開けられた孔は「臍（へそ）」、胴から下の先端が尖（とが）った部分は「足」、そして足部分にある弦の端を結びつけるアザラシの毛皮は「陰部」と呼ばれる。「臍」からはガラス玉などを入れ、それによって楽器に生命が宿ると考えられている。

次に実際の演奏方法の指導に入ったが、最初にトンコリの調弦をおこなった。トンコリの「頭」を上にして向かって右側の弦から１〜５番とすると、１、３、４番目の弦が「アーネカー」と呼ばれる細い弦、２番目と５番目が「セルスカー」と呼ばれる太い弦である。調弦は、チューナーや調弦済みのトンコリの音を聞きながら、弦の音程を１本ずつ合わせていく作業である。まず、細い弦から始め、３弦を一番高い「レ」、１弦を「ド」、４弦を「ラ」の音にそれぞれ合わせる。次に太い弦も同様に、５弦を「ミ」、２弦を「ソ」に合わせる。

調弦が完了すると、実際の演奏である。座ってトンコリを左肩に立てかけ、両手の指先で弦を弾く演奏法が基本であり、他に横向きに持って演奏する方法もある。独自の記法を取り入れた楽譜を見ながら、「イケレソッテ」と呼ばれる簡単な曲の演奏をおこなった。１小節づつ講師がどの弦をどの指で弾くのか説明しながら練習し、30分程度で何とか１曲を最後まで通して弾き終えることができた。

＊　＊　＊

熟練者は調弦を１分以内で完了するとのことでしたが、これは初心者にはかなり難しい作業でした。各自が同時に調弦をおこなったので正しい音が取りづらい状況だったこと、また、やっとのことで音を合わせても、弦を張る糸巻きが滑って弦が緩むこともあって、調弦にはかなりの労力と時間を費やすことになりました。

調弦に手間取って実際の演奏時間が短く、その点に物足りなさを感じた参加者もいらっしゃいましたが、調弦の方法やその難しさを感じとることができたことも講習の成果と考えています。複雑な曲の演奏にはまだまだ程遠い状態ではありましたが、これをきっかけにアイヌの音楽や文化全般に対する興味・関心が高まってくれることを期待したいと思います。

（学芸課　中田　篤）

博物館クラブ　石器づくり

講師　本吉　春雄氏（遠軽考古学同好会会長）

平成13年6月23日(土) 10：00～11：30 当館敷地内

石器は旧石器時代の人びとが生活道具の一つとして作り始めました。北海道では鉄器が広く伝わるまでの長い間、主な生活道具として石器が使われていました。その間、石器も目的や用途によっていろいろなものが作られてきました。槍（やり）の先やナイフとして使われた石器（尖頭器）、木を切ったり、削ったり、土に穴を掘ったりした道具（石斧）、皮なめしなどに使われた石器（掻（そう）器）など、たくさんの種類の石器があります。

これらの石器の材料として代表されるのは黒曜石（天然のガラス質の石）です。北海道には白滝や置戸など黒曜石の産地があることから、黒曜石製の石器が遺跡から多く出土します。

今回の博物館クラブ「石器づくり」でも、黒曜石を使って石器を作ってみました。参加者は、本吉先生に手ほどきを受けながら石器づくりに挑戦していましたが、黒曜石の原石から槍の先やナイフになりそうな石器がなかなか作れず、苦労しているようでした。

（学芸課　角　達之助）

今号の表紙　―ナーナイの花嫁衣裳―

表紙はロシアのアムール川中流域に暮らすナーナイの花嫁衣装（背部）です。布製で、背中の部分には、上から天上、祖先が住んだ森、今の世界が表されており、腰にあたる左右の部分には生命樹とか家族の樹と呼ばれる文様が刺繍（ししゅう）されています。この家族の樹の文様には、子孫の繁栄を願うという意味がこめられています。

コンドン村博物館の館長によると、花嫁衣装は３枚重ねにするそうで、この形のものは一番上に着るものだということです。

現在このように美しく刺繍された衣装を持つ女性でも、自分の結婚式ではウェディングドレスを着たというお話をされていました。

第16回特別展

美しき北の文様

the brilliant northern design

開催期間：2001.7.19（木）～9.26（水）
会　　場：当館特別展示室（有料です）

北方に暮らす人びとの衣服や道具の多くには、様々な意味がこめられた文様が美しくほどこされています。今回の特別展では広く北方地域を対象に、文様の特徴や意味、装飾手法や歴史を紹介し、美しい北の文様世界へとご案内いたします。

訂正：ちらし・ポスター左のCreeとあるキャプションはAthabaskanの誤りでした。訂正いたします。

News

みんぞく　こうこ　はくぶつかん in　北海道

このコーナーでは当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

4/5(木)　北海道がアイヌ語を起源とする道内の地名を集めた「アイヌ語地名リスト」と、入門編の「アイヌ語地名ハンドブック」を発行/Y

4/7(土)　南茅部町の著保内野遺跡から出土した国の重要文化財「中空土偶」が、ロンドンの大英博物館の特別展「祈りー日本の聖なる美術展（仮称）」に出展することが決定/Y

4/17(火)　60年余り前に建てられた有珠聖公会・バチェラー夫妻記念堂の修復工事が開始、伊達市/D

4/26(木)　旭川市博物館が縄文時代の人びとが身につけていた衣服や石器ナイフなど、生活用具を集めた「縄文体験キット」を制作/D

5/5(土)　カナダ・ヌナブット準州の先住民族イヌイトの若者が来道、白老町/D

5/11(金)　萱野れい子氏（二風谷アイヌ資料館館長夫人）が秋サケの皮で作った着物（チェプウル）を復元/AS

5/18(金)　アイヌ民族の若者ら11人が、7月にカナダ西海岸で行われる地元インディアンのカヌー大会にイタオマチプ（アイヌ民族伝統の船）で参加することを決定/D

5/25(金)　縄文時代を再現した北黄金貝塚公園が完成、伊達市/M

6/5(火)　網走の北方少数民族資料館「ジャッカ・ドフニ」（ウイルタ語で「大切なものを収める家」）が、開館以来初めて学芸員を配置し、運営の建て直しを図る/D

※AS：朝日新聞、D：北海道新聞、M：毎日新聞、Y：読売新聞
複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

■執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等（4～6月）

・小谷凱宣　2001『在外アイヌ関係資料にもとづくアイヌ文化の再構築』南山大学人類学研究所

・甲地利恵　2001『民族音楽アーカイヴズにおけるマルチメディア・データベースに関する研究ー音響を主体とするメディア統合をめざしてー』代表者拓植元一（東京芸術大学音楽学部）

・（財）アイヌ文化振興・研究推進機構　2001『食べものー秋から冬へー』（VHSビデオテープ）

・（財）アイヌ文化振興・研究推進機構 2001『縫うー木綿衣ー』（VHSビデオテープ）

・八雲町教育委員会 2001『八雲の熊ー北の伝統工芸ー』（VHSビデオテープ）

■主な来館者（4～6月）

5/3（木）
国學院大學
教授　加藤　晋平 氏
札幌学院大学
助教授　鶴丸　俊明 氏
北海道教育庁生涯学習部文化課
主幹　畑　宏明 氏

■行事案内（7～9月）

7/19(木)-9/26(水)
第16回特別展「美しき北の文様」
7/28(土)
講演会「美しき北の文様」
7/29(日)
講習会「ポンサラニッづくり」
8/11(土)
博物館クラブ「北の文様いろいろ」
8/12(日)
講座
「特別展『美しき北の文様』解説」
8/22(水)　講習会「ウイルタ刺繍入門」
9/8（土）講習会「サミのひも織り」
9/19(水)　講習会「アイヌ刺繍入門」

■その他の行事報告（4～6月）

5/5（土・祝）　こども映写室
5/18(金)、19日(土)、20(日)
講習会「とんぼ玉づくり」

■観覧者動向（4～6月）

	常設展示
4月	1,378名
5月	1,784名
6月	2,306名
計	5,468名

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせを。

北方民族博物館だより
―第　42　号―
2001年7月27日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
E-mail:hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ:http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/